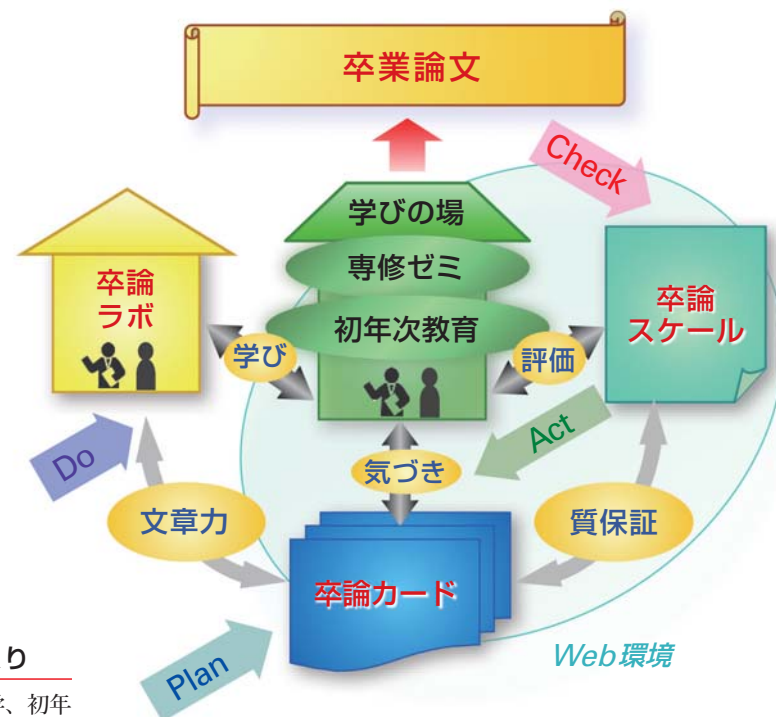


文部科学省GP事業「大学教育・学生支援推進事業 大学教育推進プログラム」に採択

文学士を实質化する〈学びの環境リンク〉

——卒論ラボ・スケール・カードの有機的な連携による“気づき”を促す仕組み作り——

文部科学省GP事業における平成22年度「大学教育・学生支援推進事業 大学教育推進プログラム」に、文学部が申請していた「文学士を实質化する〈学びの環境リンク〉」が採択された。今回のプログラムには、全国の国公立大学などから298件の申請があり、30件が選ばれた。関西大学文学部の学びはどう進化するのか——。



▲〈学びの環境リンク〉イメージ図

◆卒業論文作成を通して学士力を培う環境づくり

関西大学文学部では、1学科多専修制による一括入学、初年次教育の充実、2年次専修分属、19の専修領域におよぶ幅広い学び、専修ゼミによる卒業論文作成を通じた深い専門的探求など、継続的に改革を進め、現在、多様な領域の総合性と課題探求の独創性を培う教育課程を実現している。

このような教育課程のもとで、学生自身の気づきと主体的な学びを促すことによって、多様な社会の中で生きる力(学士力)をより効果的に培い、約2万字(400字原稿用紙50枚程度)におよぶ卒業論文の作成過程を通じて文学士を实質化するため、初年次教育・専修ゼミを学びの中心にした学びの環境づくりに、今年度から3年間にわたって取り組む。

◆3つの環境づくり〈学びの環境リンク〉とは？

具体的には次の3つの環境づくりによって〈学びの環境リンク〉を形成する。

●卒論ラボ

確かな文章力を育むために、アカデミック・ライティングの環境づくりをめざして、〈卒論ラボ〉と名づけた施設を設置し、初年次教育・専修ゼミと連携しながら啓発行事や講座の開催、レポート・卒業論文の作成指導・支援を行う。

●卒論スケール

自分自身の達成度を測るために、卒業論文作成にどのような専門的知識・理解が必要であり、その評価はどのような基準でなされるのか、などを策定し、それを〈卒論スケール〉と名づけてweb上に明示化し、学習成果の検証と質保証の環境を整える。

●卒論カード

初年次教育・専修ゼミを中心にして気づきと主体的な学びを育むために、学びのプランニング、各テーマの文献、また卒業論文の構想や草稿、さらにはスタッフからのアドバイスなど、卒業論文作成に必要なデータを〈卒論カード〉と名づけたweb上の「ポートフォリオ」に統合し、web環境を整備する。

★〈卒論カード(Plan)〉には〈卒論ラボ(Do)〉と〈卒論スケール(Check)〉の情報をも統合することによって気づきと主体的な学び(Act)を促し、卒業論文の作成に最適な〈学びの環境リンク〉を形成する。



1万人参加の大規模地震避難訓練を実施

関大防災Day2010 ～広がれ！みんなの安全・安心！

エリアワンセグで学生の携帯に情報配信

授業中にマグニチュード7.6の大地震が発生！
——関西大学ではどのように対応するか？
9月28日、総面積が約35万㎡という
広大な千里山キャンパスで、学生・教職員約1万人が参加する
大規模な地震避難訓練が実施された。

◆大地震発生～避難～安否確認

関西大学は、「危機管理マニュアル」を作成した2008年度にも大規模な地震避難訓練を実施した。2度目の今回は「関大防災Day2010」として、避難訓練をはじめ、防災にかかわるさまざまなイベントも併せて行われた。

訓練では、2時限目の授業中にマグニチュード7.6の上町断層直下型地震が発生したと想定し、学生・教職員の地震発生時の初動対応から対策本部の設置、避難誘導、避難者の安否確認に至るまで、本学オリジナルの「地震対応マニュアル」に基づいて実施した。

午前11時35分、キャンパス全域で避難訓練実施の告知放送があり、11時40分、地震発生を告げる地震音が流れた。直ちに、凜風館1階学生ラウンジに対策本部を設置。教職員らが各避難場所まで学生を誘導。その後、安否確認シートを配布・回収した。

◆エリアワンセグで緊急時の情報確認

今回の新しい試みの一つは、エリアワンセグを用いた情報配信。緊急災害時には、さまざまな情報が安全を大きく左右する。黒田勇副学長は、「エリアワンセグなどを使って大学から学生に対し情報を流すことで、安心感を与えることはとても意味がある」と言う。

エリアワンセグとは、携帯機器向けの地上デジタル放送である



エリアワンセグを用いて、緊急時の情報を携帯電話に配信



凜風館に設置された対策本部

「ワンセグ」を使って、テレビ局の放送とは別に、狭いエリアに限定して独自の映像やデータを配信するサービスのこと。この避難訓練では、朝日放送と協力し、対策本部で収集した交通機関の運行状況の情報や、被災後の行動指針等を、学生の携帯電話に配信する実験を行った。学生らは、学内の被災状況、避難経路、帰宅時の注意事項などを受信し、情報を取得することができた。

◆疑似地震体験で避難方法にも注目



午後からは、「防災講演トークイベント」、吹田西消防署による「普通救命講習会」も開かれた。

現場では、学生ボランティアが活躍。バケツ200個を使用した「給水(バケツリレー)検証実験」で、有事の必要人員や時間の検証を行った。さらに、地震体験車による「地震体験コーナー」、テントハウス内に無害な煙を発生させる「煙体験」にも、多くの学生が参加した。揺れや煙の怖さを体験することにより、避難方法にも関心が向けられるようになり、防災意識が高まった。